

令和 6 年 度 自 己 評 価 表

鳥取県立鳥取盲学校

中長期目標	視覚障がいのある児童生徒が自己の持つ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うとともに、多様な教育ニーズに応じた指導の充実を図る。	今年度の重点目標	①主体的に学習に取り組む態度の涵養を目指す教育の充実（専門性向上）
			②キャリア教育の推進（地域やふるさとに誇りと愛着を持ち、未来を創造する力の育成）
			③仲間と信頼関係を深め、協力して生活の質を高め合う児童生徒の育成
			④チームで取り組むセンター的機能の充実

年 度 当 初				評 価 結 果 (1) 月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価 改善方策
①学習指導の充実及び専門性の向上	児童のコミュニケーション能力の向上に向けた指導の充実（小中学部）	○児童のコミュニケーション能力の向上に向け、語彙力や表現力の向上の育成を継続的に行い、相手への適切な伝え方の指導を継続して行っている。 ○新入生 2 名が入学し、複数名の在籍となった。	語彙が増え、自分の思いを伝えたり、自分の考えを表現したりする場面が増える。	○聴覚、触覚、保有する視覚などが十分に活用できる場面を設定する。 ○体験的な活動を十分に受け入れ、具体的な事柄や動きと言葉とが的確に結びつくようにする。 ○国語科を中心として語彙を増やすこと、適切な表現の仕方を指導、支援する。	○児童につけたい資質・能力を小中学部内で共有し、学年に応じた表現力、語彙力の育成に努めた。また、活動に見通しが持てるよう工夫しながら、実物や体験を意識して取り入れた。 ○学校、学部の行事の場で発表・表現を重ねていく中で、他者を意識した関わりが増え、自信とつながってきた。	B 引き続き実感をとまなう体験的活動を意識して取り入れ、児童生徒の概念形成を促すとともに、人と関わりが楽しめるような環境作りに努める。
	自ら学習課題や探究テーマを設定追究し、その成果を発表できるような学習指導の充実（高等部普通科）	○自らの進路実現に向けて学習に向き合おうとしている。 ○授業や各種行事を通じて学習成果発表の場は設定されている。 ○社会でも必要なコミュニケーション力を一層育成する必要がある。	自ら課題（テーマ）を設定して探究し、学んだ学習成果を授業、行事などで工夫して表現（発表）する。	○各種行事で探究するテーマを設定し、発表・表現する機会を設ける。 ○各授業担当者が、年間の中で学習の成果が表現できるような実践を行う。	○島盲フェスタで、生徒自らが学習の成果を工夫を交えて発表することができた。またその際、保護者、地域の方々に対して自らの言葉で伝えようとする姿も見られ、表現力を鍛えるいい機会となった。修学旅行では各自がテーマを設定して 3 日間充実した学びとなった。特に企業訪問では社会人として大切にしなければならぬ素養や身につけるべき力の指針を得た。 ○各教科、校内研究の取り組みを通じて生徒個々の課題、特に表現力を高めるため、授業の工夫改善に取り組めた。	B ○卒業・進学を控え、部科や学校全体でこれまでの歩みをまとめたり、形に残したりする活動を通して、引き続き表現力を磨く支援に取り組む。 ○1 年間研究で取り組んできた表現力の育成を、各教科年間の授業のまとめの中で実践する。
	生徒の進路実現につなげるための資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントに基づいた指導の充実（保健医療科・専攻科医療科）	生徒は、本年度入学生であり、進路希望をより具体化していくことや希望する進路の実現に向けて多くの活動に取り組む必要がある。	○医療の知識・技術を活かした就労生活、自立した社会生活ができる力が向上する。 ○個々の進路目標の具体化をめざす。	キャリア教育を柱としたカリキュラムマネジメントに基づく学習や様々な実習活動、治療院見学等を実施することで指導の充実を図る。	進路懇談や治療院見学、様々な実習行事を通して医療の資格を生かした様々な働き方や医療の魅力に触れることができた。	B 個々の進路目標を具体化するための見学実習や進路懇談等を充実させる。
	各教科・分掌と連携を図り、円滑な日程調整と連絡、適正な授業時数の取扱（教務部）	教科によって、標準時数を下回ることがある。	全ての教科で授業時数を確保し、標準時数以上で実施する。	○授業振替、曜日振替を行い、過不足がないようにする。 ○時数集計表を活用し、授業時数を提示して、調整を行う。	ほとんどの教科で標準時数を実施できたが、卒業学年では実施時数が少なくなることがある。	B 次年度も休日が多い月曜日振替を実施するとともに、時数集計表を見ながら、授業時数の過不足を担任や教科担当と連携しながら調整していく。
	つけたい児童生徒の資質・能力を明確にし、カリキュラム・マネジメントに基づいた授業づくりと実践の共有や評価の検討（教育研究部）	昨年度、各教科学習の年間計画が一覧となった単元配当表を基に、教科の担当者間で連携し、各グループで児童生徒の主体的な学びを深める実践に取り組んだ。カリキュラム・マネジメントを理解し実践に取り組んでいるが、成果を感じるまでには至っていない。	つけたい児童生徒の資質・能力を明確にし、カリキュラム・マネジメントに基づいた授業の実践に取り組む、評価できる。	○校内研修で、カリキュラム・マネジメントについて理論の確認や昨年度の実践例を紹介する。 ○グループ研で、各児童生徒につけたい資質・能力を検討して共通理解を図る。単元配当表を基に、教科の担当者間で連携し、カリキュラム・マネジメントに基づいた授業を計画する。 ○実践の共有や評価のあり方などについても十分検討する。 ○成果と課題を評価する上での参考となる具体的な実践例を示す。	○児童生徒につけたい資質・能力について各グループで検討し、概ね共通理解を図り、各教科の担当者間で概ね連携して取り組むことができた。 ○評価についてはあまり検討できなかった。 ○研究授業、研究協議会（11/19）で実践の共有ができ、評価のあり方についても講師の青木先生から指導助言を頂いた。	B ○来年度の始めに研究テーマについて全体で確認し、研究を進めていく。 ○教育支援計画に基づき、児童生徒をどう育てたいか、学校外組織との連携体制の構築に向けてどうあるべきかを議論し、実践する。

様式 3

	発達段階に応じたキャリア教育の充実（支援部）	○小学生から成人まで、発達段階や生活年齢の幅が広く、生活や学習の課題が多岐にわたっている。 ○自己の生き方や進路実現に向けて、体験活動を進めている。	キャリア発達段階を意識した指導、生徒の希望に応じた進路情報の提供、体験学習を行う。	○キャリア発達段階を意識し、家庭と学校が連携することで自立のための基礎的能力を高める。 ○進路実現に向けて体験学習や各種模擬試験等を実施する。 ○生徒と個別に面談を行い、必要な情報を提供する。	○係活動や委員会活動と家庭での役割等、家庭と学校が継続して取り組んだ。また、長期休業中の手伝いや生活について、他分掌とも連携して取り組んだ。 ○生徒の進路希望に合わせた実習や体験、模擬試験を実施した。また、個別進路懇談や先輩に学ぶで講話の実施により、進路に関する情報提供を行った。	A	○発達段階に応じた児童生徒、家庭の役割について理解、啓発を進める。 ○生徒の進路実現に向け、部科との連携を深める。
②キャリア教育の推進	社会参加を意識した人との関係づくり、協力して取り組む力の育成（寮務部）	個別的教育支援計画をもとに、舎生一人一人の障がい特性を理解し、社会自立へ向けての指導支援を生活全般・行事等で行っている。舎生同士と一緒に活動する機会が徐々に増え、行事や生活面で他者を意識した言動が増えてきてはいるが、全体としての意識はまだ低い。	舎生一人一人の実施を職員間で共有し、職員が舎生の他者を意識した働きかけを行う中で、舎生のあいさつや言葉かけ、行動等が増える。	○生活の中で、他者を意識した場面をできるだけ多く設定する。 ○寄宿舎における行事・活動等の企画・運営で、舎生が互いに協力しながら内容を考えたり運営したりする場面と十分な時間を設定する。 ○家庭・学校等との連携を軸とした主体性育成のための指導・支援を行う。 ○盲生と豊生と一緒に活動する場合は、必要に応じて職員が手話通訳などの仲立ちを行う。	舎友会行事や活動を通して挨拶や相談、教えあう姿が以前より増えてきた。特に盲生から豊生に話しかけたり手話を使ったりしてコミュニケーションをとっている場面が増えた。	B	○学校（部科）と連携しながら、舎生に対して寄宿舎として一貫した働きかけを行う。 ○情報共有や指導・支援について、引継ぎやケース会、グループ等のあり方を再検討する。 ○舎生の考えや思いが把握できるような舎生の実態に応じた働きかけの工夫をする。
③仲間と協力する児童生徒の育成	異年齢集団による児童生徒会活動や行事等を通じた思いやりの精神や企画・調整・発信力などの社会生活の基盤の育成（指導部・イノベーションプロジェクト実行委員会）	○今年度は小1から専攻科の大人までの幅広い年齢層での児童生徒会活動になる。 ○児童生徒はこれまでの活動で仲間と協力しながら主体的に取り組むことで達成感を感じるとともに、実践力も身につけてきている。	各年齢・学年に応じた思いやりや主体的に工夫・協働・課題解決する実践力が育つとともに、活気あふれる学校づくりやより良い校風につながっている。	○行事等の成功に向けて担当児童生徒の話し合いの時間を確保する。 ○教職員は児童生徒の話し合いが主体的に行えるように見守りつつ最小限の助言を行う等の支援をする。 ○児童生徒教職員は企画運営の振り返りを行い、次の行事の改善につなげる。	児童生徒が自己の役割を遂行し、児童生徒会活動や学校行事に取り組んだ。話し合いを重ね、主体的にプロジェクト立案した行事では、達成感や自己有用感、行事の成功につながった。	A	今年度に引き続き、児童生徒がさまざまな行事に主体的に協働・課題解決する力を付けることができるよう、支援の工夫に努める。

様式 3

④センターの機能の充実	積極的な情報発信によるセンターの機能の周知と視覚障がい者の理解啓発、指導支援の充実と推進（支援部）	○県内弱視学級10校とGoogleClassroomを作り、全5回の視覚障がい教育ミニミニ研修会を実施した。 ○8月と12月に弱視学級とのふれあい交流会を実施した。 ○依頼を受けて視覚障がい者理解学習への協力、支援グッズ等の展示・紹介を行った。 ○県内19の市町村乳幼児健診担当課へ教育相談チラシの配布を行った。	積極的な情報発信をしてセンターの機能の周知をし、校内の人材を活用した見え方等にに応じた支援を進める。	○ホームページやおたより、GoogleClassroom等により情報発信をする。 ○ミニミニ研修会の反省をもとに、よりニーズにマッチした研修会の実施方法、実施内容を検討する。 ○視覚障がい者乳幼児支援の充実のため、外部講師を招いての研修会を夏季休業中に実施する。 ○特に全盲児の発達支援について研修を重ね、支援に生かす。	○10月に実施したミニミニ研修会では、ICT活用を新規に含めた6つの内容を日中と放課後の2回ずつ実施した。 ○東部地区の弱視学級とくらら幼児に見え方相談を実施した。 ○冬のふれあい交流会では、視覚障がい者スポーツやレジャー用具体験を新たに実施し、児童同士が関わりあう場面が増えた。	○弱視学級での見え方相談を継続して実施し、相談内容の把握に努める。 ○安心して次のステップに踏み出せるよう、適切な情報提供を行いながら就学支援をすすめる。 ○参加が増えるよう実施日を早めに決め、夏と冬にふれあい交流会を行う。 ○視覚障がい者理解のための研修を引き続き実施する。
	鳥旨ボランティアとの活動による地域との連携の深化（総務部）	昨年度より鳥旨ボランティアの活動を再開した。ボランティアの人数は多くはないものの、年間の予定に沿って活動できている。さらなる地域の方との連携を深めたい。	鳥旨ボランティアと児童生徒とのふれあいを増やし、地域との連携を深める。	○学校の要望と地域の方の願いを聞きながら新たな鳥旨ボランティア会員を募集する。（現ボランティアの方からの紹介含む。） ○お互いに有意義な活動となるよう活動内容を計画して実施する。	本年度4月の方に新規ボランティアとして加わっていただけではなく、鳥旨フェスタや地域あんま奉仕等のイベントにおいても参加していただき、児童生徒とふれあい（交流）場面が増えた。	○ボランティア登録を増やして啓発活動を継続して取り組む。 ○ボランティアの方だけでなく、地域の公民館等とも連携し、地域とのつながりを強めていく。

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し
[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]